

翻 訳 家 奚 若

附：奚若と謝洪賚の略年譜

樽 本 照 雄

清末翻訳家のひとりに奚若がいる。

彼の翻訳した小説作品は、多い。アラビアン・ナイト、シャーロック・ホームズもの、ハガード、モリソン、ヴェルヌなどは大衆小説だ。ほかにも原作者、原作品ともに不明の作品がいくつかある。いずれも英語原作から翻訳している。

奚若は、奚若である。

なぜそうなのか。奇妙に思われる人もいるだろう。

人名辞典類に彼の名前は収録されていない。以前は、誰か別人の筆名だと考えられていた。名前のあがった人物は少なくとも3名いる。張奚若だ、伍光建だ、また周桂笙だ、と諸説がとなえられていた。決め手がないらしい。私はそれらをひとつひとつ検討した。その結果、奚若はそれらの人々とは関係がない、別人であることを明らかにすることができた。すなわち、奚若は奚若である。その問題についてはかたづいたと思った。ところが、私の文章を見たはずのある研究者が、奚若 = 伍光建説をわざわざ知らせてくれるのだ。落胆した。この誤解は根強くつづいていといわなければならない。

当時、奚若の経歴について私が調べて知ったことは、それほど多くはない。

奚若（伯綏）は、アメリカのオベリン大学で修士号を取得した。青年協会書局（Association Press）で謝洪賚とともに働いたことがある*1。英語が堪能だったから『繡像小説』にアラビアン・ナイトを漢訳し「天方夜譚」と題した。1903年以降のことだ。1906年、商務印書館が主宰する速成小学師範講習所教員に就任し、編訳所で働いていた。1909年の編訳所名簿に名前があることからそれがわかる。1912年6月、『英華大辞典』を増補する仕事を引き受け、その直後に商務印書館

の理事になった。1919年5月15日の『張元濟日記』には、奚伯綬の普通預金について記録している。当時は商務印書館に勤務していたらしい(後述)。

奚若は別人の筆名ではない。奚若その人であることを説明するために紙幅をとってしまった。それが、以前の私の状況だ。奚若に関する情報は少なかった。

今から見れば、調べが不足している。奚若のアメリカ留学と商務印書館編訳所勤務の時間関係がはっきりしない。掘った文献には、奚若のオベリン大学修士号取得には言及する。しかし、それが何年のことだか説明がなかった。生没年も明らかではない。『英華大辞典』の仕事に対して商務印書館から報酬が出ているが、編訳所の職員であれば給料とは別なのか。疑問が残る。詳しいところがわからない。いかにも不十分だ。気になっていた。

インターネット上に限って発表される有益な研究が出現している。今、それらを参照しながら資料を追加して調査した。奚若について、もう少しのべる。

陳応年「奚若，一位被人們遺忘的翻譯家」が『中華讀書報』(1999)に掲載されていることはわかっていた。該紙を入手できないでいたところ、これもインターネットで読むことができた。ここからはじめよう。

陳応年論文を手がかりに

忘れられた翻訳家、という論文題名が奚若という人物を表現して当たっている。

このばあいの「忘れられた」とは、作品とともに誰も取り上げなくなった、という意味ではない。たとえば、「天方夜譚」は長く広く読みつがれている。版を重ねて刊行された。しかし、訳者その人については忘れられてしまった。経歴が不詳だ。奚若とは実はこの人だ、と複数の別人があげられていることから理解できる。

陳応年論文で私が注目するのは、奚若が伍光建の筆名だと誤解された根拠を明らかにしているところだ。

私が諸説のうちの一つ奚若 = 周桂笙説を否定したのは、さかのぼると1985年のことだった。その昔から奚若については知られていなかった。特別の問題として存在していた、と言いたいのだ*2。

その後、北京図書館編『民国時期總書目(1911-1949)』外国文学(北京・書目文献出版社1987.4)を見た。奚若は伍光建だ、と注釈がつけられている。私は奇妙に思った。実際のところ「天方夜譚」に当たっても、そう記述されているわけではないからだ。だいいち奚若は蘇州の人だが、伍光建は広東新会県出身だ。明らかに異なる。

奚若 = 伍光建だと注記したのは『民国時期総書目』の编者だろう。それは間違っている。ゆえに、樽本編『新編清末民初小説目録』（〔第2版〕1997）には、「[民外0313]は、訳者奚若原名伍光建とするが、誤り。別人」（640頁）と説明しておいた。

陳応年も伍光建説に疑問をもった。彼が根拠としたのは、伍光建の親族が残した文章だ。それらには、いずれも「天方夜譚」に関する記述がないという。そこで彼は、上記『民国時期総書目』の編集作業に参加したことがある責任者に伍光建説の根拠を質問した。彼が得た回答は、北京図書館で蓄積していた訳者カードに拠ったものだろうという思い出話だった。ならば、十分な証拠とすることはできない。陳応年はそう結論づけた。陳の意見は、私が調べたことと偶然に一致したというわけ。

陳応年は、奚若が翻訳した小説作品以外の書籍も示す。

『昆虫学』1904、『最新中学教科書動物学』1905、『最新中学計学教科書』1906、『植物学教科書』1907、『世界新興図』1909、『華英会話文献辞典』1910など、いずれも商務印書館から発行された。前の4書はアメリカ人の著作を漢訳したものである。

これらの書名を見れば、奚若が翻訳編纂したのは各種教材だとわかる。そこから編訳所博物理科部の編集者だったろう、と陳は推測した。もっとも、編訳所における所属については後に「英語部、または教科書」と訂正する*3。確定するための資料は商務印書館内部にはないらしい。ただし、少なくとも編訳所に勤務していたことはわかる。

その証拠は蔣維喬の日記にもある。陳応年が提出するのは『商務印書館館史資料』第46期（未見）に収録された蔣維喬日記だ。1904年10月前後、1905年正月22日、1906年前後に奚若（伯綬）の名前が出てくると指摘する。陳応年が示すそれらの日付は、旧暦と新暦を混用している。細かいようだが、注意が必要だ。

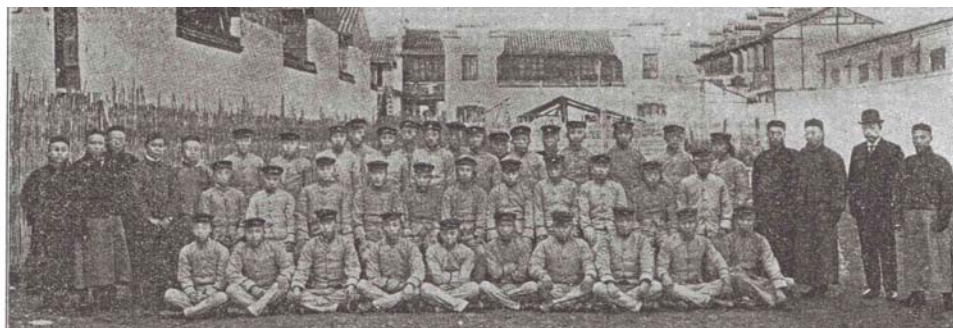
蔣維喬日記は、のちに『出版史料』に掲載された。それを見る。

汪家熔選注「蔣維喬日記選」（『出版史料』1992年第2期（総28期）1992.6）によって上の説明を確認しておきたい。抜粋して大要は以下のとおり。カッコ内に新暦と注を補う。

光緒三十年十月二十一日（1904.11.27）、（奚）伯綬らと徐家匯天文台に行く。

48頁

光緒三十一年正月二十二日（1905.2.25）、奚伯綬らと理科について話す。49頁



本館創設速成小学師範講習所第一次畢業時撮影

教員

徐球、蔡元培、杜亜泉、徐傳霖、徐念慈

教員

蔣維喬、奚若、長尾稹[楨]太郎、巖保誠

同年三月十三日（1905.4.17）、私（蔣維喬）は奚伯綬君と新衙の西に部屋を借り、
本日引越す。同上

光緒三十二年二月二十八日（1906.3.22）、伯綬と植物学を翻訳する。同上

同年三月初六日（1906.3.30）、許志毅、奚伯綬の招待で一品香へ行く。50頁

光緒三十三年四月初十日（1907.5.21）、夜、伯綬にかわって（編訳所の）夜勤に
あたる。51頁

同年八月初九日（1907.9.16）、伯綬のところで高等植物学教科書をともに訳す。
52頁

以上を見れば、蔣維喬と奚若はかなり親しい間柄だ。一時期は上海で同居している。編訳所においてふたりは教科書の翻訳を行っていた。あとで述べるが、蔣維喬日記に見える時期、すなわち1904年から1907年あたりまで、奚若は蘇州にある東呉大学の学生だった。奚若は蘇州と上海を行き来していたことになる。

編訳所員は、本来の仕事のほかに商務印書館が運営する師範講習所で教員をするのが決まりだった。なるほど、速成小学師範講習所第1回卒業の集合写真（光緒三十一年十二月十六日 1906.1.10）に、蔡元培、徐念慈、蔣維喬、長尾楨太郎（山高帽子の人物）らとともに奚若の姿が見えるのはそういう理由なのだ。

該講習所が開所したのはさかのぼって同年七月二十日（1905.8.20）だった。半年にも満たない課程だから速成という。

蔣維喬日記を見ていて、陳応年が言及しなかった部分があることに気づいた。

光緒三十三年五月初二日（1907.6.12）、午後、江蘇教育總會に行き仁冰と伯綬のかわりに公文書を受け取る。南洋大臣が官費生をアメリカに留学派遣するにあたり仁冰と伯綬のふたりが受験するのである。51-52頁

宣統二年六月二十三日（1910.7.29）、夜、奚君伯綬のために送別会を開く。奚君が来月アメリカに遊学するためである。60頁

奚若がアメリカのオベリン大学に学び修士号を得ていることは述べた。上の記述は、文面通り彼のアメリカ行きを説明しているにほかならない。1910年に渡米したという蒋維喬の記録があることに注目したい。

そうすると、「天方夜譚」ほか多数の翻訳小説、あるいは各種教科書の翻訳は、アメリカに留学する前の仕事ということだ。

奚若が編纂した辞典がある。中国の古書店がインターネット上で書影を掲げているのを見つけた。8版と16版だ。

吳鼎奚若編纂『華英会話文件辞典』商務印書館 庚戌年八月初版、民国六年二月八版

吳鼎奚若編纂、紹興馮蕃五訂正『（訂正）華英会話文件辞典』商務印書館 庚戌年八月初版、民国十四年二月十六版

英語表記が示してある。書名は“AN ANGLO-CHINESE CONVERSATIONAL DICTIONARY”となる。

奥付の記述が興味深い。刊行年月を見る。初版の庚戌年は1910年だ。「八月」は説明するまでもなく旧暦である。私が「八月」と書いて旧暦を示すのは、月だけだと新暦に換算できないからだ。

前出の蒋維喬日記に見える奚若のアメリカ行は、旧暦六月だった。それとあわせて考える。『華英会話文件辞典』初版は、奚若がアメリカに行ったあとに刊行された。編纂と校正を終了したあとに渡米したから、実際の刊行は1910年八月頃になったのだろう。ところが、8版には英文の編者序がついており文末に「P.S. YIE. / August, 1910」とある。庚戌年八月が旧暦であるにもかかわらず、英語表示の1910年8月では新暦と勘違いしてしまう。どのみち、奚若はすでにアメリカに旅立ったあとだ。序文の日付は発行予定にあわせたものだろうか。それともアメリカ

で書いて郵送したものが。詳細は不明だ。

辞典は「訂正」されて16版が新暦の1925年2月に出版された。おもしろく感じるひとは、8版でも見た奚若らの英語名だ。以下のとおり。

Author P.S.Yie / Editor F.W.Feng

ウエード式ローマ字表記だろう。編者の馮蕃五は Feng Fan Wu となる。F.W. Feng がそれに該当している。ここにはなにも問題はない。

では、編纂者の奚若を英語名で P.S.Yie と表記するのはなぜなのか。奚若は Hsi Jo (転倒させれば Jo Hsi) となるはずだ。奚伯綬ならば、Hsi Pai Shou だ。P.S. が伯綬に当る。では Yie はなにか。そもそもウエード式にはそういう綴りはない。方言にもとづいているのか。ウエード式とは関係なく独自に表記したのだろうか。疑問としておく。

少しはずれるが旧暦新暦混用についてもういちど触れる。

上の例でいえば、「初版は1910年八月」を中国では「1910年8月」と普通に表記する。知っていれば旧暦新暦の混用だとすぐわかる。しかし、アラビア数字で統一すると、「1910年」とともに「8月」が新暦になってしまう。まぎらわしい。一般の研究者、研究書は、そこを厳密に区別しない。中華民国が成立してそれまでの旧暦を廃止し新暦を採用した事実を無視している。この「8月」は旧暦だ、といっても他人には理解できない。どう区別するか。私は、「1910年八月」と書く。

『(訂正)華英会話文件辞典』の奥付に次のような表記がある。「此書有著作権翻印必究 / 前清宣統三年四月初三日稟部註冊五月十四日領到著字第一百四十六号執照」。著作権の登録表示だ。後半の許可証146号受領の日付を見てほしい。「宣統三年五月十四日」は、新暦では1911年6月10日に該当する。ところが、奥付の英語が「Copyright, May, 14, 1911, Certificate No. Chu 146」となっている。宣統三年を機械的に1911年と書き換えただけにすぎない。旧暦の「五月十四日」をそのまま「May, 14」にしてしまった。これではどう見ても新暦を表わしていることになるではないか。

商務印書館が自社の刊行物であからさまに旧暦新暦を混用している。というよりも、序文では編纂者の奚若自身が区別をしていない。旧暦新暦混用の早い例として指摘しておく。

話をもとにもどす。

奚若は、アメリカに留学する前から辞典を編纂するほどの英語力があつた。小説作品、あるいは教科書の翻訳を軽々とこなしている。英語に堪能だったことはまちがいない。

奚若が商務印書館編訳所に勤務していたことを証言するもうひとりの人物に鄭貞文がいる。彼は以下のように記した。

高鳳謙 [夢旦] の長兄高鳳岐 (嘯桐) は、官を辞したあとかつて編訳所で編集者をしていたことがある。1908年に逝去した。全社の同僚が告別式を行なったときの名簿が残っており、清朝末期 (宣統元年 [1909]) の編訳所職員の史料とすることができる。以下の通りである。 [高夢旦的長兄高鳳岐 (嘯桐) 罷官後，也曾在編訳所當編輯，於1908年逝世，全所同人公祭的名單尚存，可作清末 (宣統元年) 編訳所人員的史料，列挙如下] *4

名簿を見れば奚若の名前がある。これにもとづいて私は、1909年に奚若は商務印書館編訳所に勤務していた、と書いた。鄭貞文が清末について「宣統元年」と注をつけている。単純に換算して1909年のことだ。

ところが、陳応年はこの名簿が「1908年」のものだと記述してしままだに訂正していない。鄭貞文の書く高鳳岐 (嘯桐) の死去が1908年であるという箇所を優先したのだろう。

結論をいってしまえば、鄭貞文の小さな誤記である。高鳳岐 (嘯桐) が逝去したのは1908年ではなく1909年のことだった*5。

1908年であろうが1909年であろうが、別にかまわない。その当時、奚若が商務印書館編訳所で働いていたことがわかればいい。

蔣維喬日記には、もうひとつ気づくことがある。謝洪賚についての情報が書き込まれている箇所に注目する。

宣統二年十二月十八日 (1911.1.18)、夜、『免癆神方』を校閲し終わる。本書は謝君洪賚の著作だ。謝君は肺を病み、治療のためアメリカに行った。身をもって示しているわけできわめて大切なのである。60頁



謝洪賚（少年時代）



謝洪賚遺像

謝洪賚が肺病治療のためにアメリカのコロラドへ行ったのは、1908年だ。『免癆神方』の著述は、アメリカで1年間の治療を終えて帰国してからなされた。出版の運びになるまで2年間がかかったことになる。

奚若は、謝洪賚との関係が深い。奚若にとっては先生だし、また一緒に働いていたことがある。つぎは謝洪賚について簡単に説明する。

謝洪賚のこと

商務印書館の創立者たちがキリスト教徒であったことは周知のことだ。何人かの父親は、アメリカ長老派教会の牧師だった。

鮑哲才、哲華兄弟、郁忠恩、謝元芳の4人は、アメリカ北長老派教会が寧波で設立した崇新書院の第1回卒業生だ。彼らの子女たちがキリスト教の信仰を持つのも自然な流れだろう。

鮑哲才の長男が咸恩で商務印書館の創立者のひとりだ。弟の咸昌も同じく創立者として名前があがっている。弟の咸昌に嫁いだのが郁忠恩の長女だった。

鮑哲才の長女は張蟾芬（創立者のひとり）と、また次女は夏瑞芳（創立者のひとり）。

社長)と結婚している。三女の嫁ぎ先は郭秉文だ。彼もキリスト教徒であり商務印書館に勤務したことがある。鮑哲才の三女がはやくに亡くなり、郭は夏瑞芳の三女路徳と結婚した。1917年当時の肩書きは、南京国立高等師範学校教務主任となっている*6。

謝元芳の長男が洪賚で次男が賓賚。謝賓賚は商務印書館に終身勤務した。謝元芳の娘、つまり洪賚の妹は4人いて、そのひとりには郁忠恩の長男と結婚した。また、妹羅采は丁榕と結婚する。この丁榕は、のちに商務印書館の法律顧問となった弁護士である*7。

以上を概観すれば、商務印書館の創業者たちは姻戚関係でたたく結びついていた。その意味で、商務印書館の初期は夏瑞芳を中心にした家族企業であったといえることができる。鮑、郁、謝の3家族が初期商務印書館の中核をなしていた。

謝洪賚(1873.5.8-1916)は紹興の人*8。十一歳のとき蘇州博習書院(Buffington Institute。後年跡地に東呉大学が移転してくる)で学び、1892年(二十歳)に成績優秀で卒業した。

10年間という就学期間を考えると、現在の中学、高校、大学に相当するだろうか*9。

時の院長パーカ - (Alvin Pierson Parker 潘慎文。1850-1924)*10に認められ、彼と夫人を助けて教科書をいくつか編訳した。代数、幾何、微積、動物学などだ。『伝略』の説明によれば、学院を卒業する前である。教科書の編訳をするくらいだから学院で英語を学習していたのかといえ、どうもそうではないらしい。謝洪賚がアメリカ人伝道師についてはじめて英語を学習したのは二十二歳のときだ。学院を卒業したあとになる。直接教わったのはわずかに七ヶ月でしかなかった。あとは独学である。二十六歳をこえて日本語を学んだのも同じやり方だった。そうすると、学院卒業前に教科書を共同編訳したというのは、パーカーが訳述するのに協力したのが事実らしい。彼の中国文の能力がかわれてのことだろう。

学院を卒業したあともパーカーとの教科書編訳の共同作業は続いた。

潘慎文訳、謝洪賚述という翻訳書がいくつかある。『格物質学』1898、『代形合参』、『八線備旨』など、いずれもアメリカ人の著作がもとになっている。自然科学、数学を内容とし、しかも出版元は美華書館という*11。美華書館という名称を見ただけでは理解するのはむづかしい。その英語表記が American Presbyterian Mission Press だと知れば納得がいくだろう。アメリカ長老派教会の印刷兼出版社

だ。商務印書館の創業者たちと関係が深いことはいうまでもない。

パーカーは、1895年*12、上海中西書院（The Anglo-Chinese College、あるいはAnglo-Chinese Methodist School。後の東呉大学。蘇州に移転）の院長に就任した。それにともない、謝洪賚も移る。パーカーはアレン（Young J.Allen 林樂知。1836-1907）*13のあとを引き継いだのだった。謝についていえば、博習書院を卒業したあとそのまま学校に留まり、23年はパーカーのもとで働いていたことになる。謝洪賚は、中西書院において最初は図書管理を担当し、翌年、科学の教授になった。中西学院では教授と著訳の生活をその後10年以上にわたって送る。商務印書館から各種教科書を刊行しているのもこの時期の仕事だ。有名なのは『華英初階』などの英語教科書だろう。

商務印書館が発行した『華英初階』『華英進階』という英語教科書は、謝洪賚の訳注であることは知られている。中国人むけに編集を工夫したこの教科書は、多くの読者から歓迎された。一時期、商務印書館の営業成績向上に貢献したのも有名だ。謝は、のちに商務印書館の最新中学教科書シリーズ12種類を編纂してもいる。謝は、もともと商務印書館創業者たちとは親しい間柄だ。『伝略』には、中西書院で教職にあった時期、商務印書館の編集も兼任していたとある（37頁）。謝洪賚は教育の普及を考え、一方の商務印書館は印刷業から業務を拡張し出版の分野に進出しようとしていた。英語教科書の刊行は、両者の思惑が一致した結果でもある*14。

1897年、中西書院にY M C Aの組織として幼徒会（1901年に青年会と改称）が設立された。謝洪賚は積極的に関わっていく。

『青年』という刊行物があるという。

17572 青年=China's Young Men 中華基督教青年会組合事務所編 v.1,no.1
（光緒二十三年一月一日[1879]^{ママ}）-v.19,no.10（民国6年11月15日[1917]）月刊 上海該会出版（後略）*15

光緒二十三年は1897年だから謝洪賚と無関係ではなさそうだ。「主編謝洪賚。主筆政者有奚伯綬、胡玉峰、范子美等」*16と説明する文章もある。ここに奚若（伯綬）が挙げられているのも興味深い。だが、実物で確認できない。そういう説明があるというだけにとどめる。

1902年、中国Y M C A（中華基督教青年会）に書報部が成立する。機関紙『学塾

月報』を『青年会報』に改題した。翌年、謝洪賚はこの書報部に参加する*17。当時、謝洪賚は中西書院で教鞭をとっているから書報部の仕事は兼務ということになる。

1903年、商務印書館は金港堂との合併会社になった。

双方が10万元を投資する条件だ。金港堂の10万元は、社主の原亮三郎が出した。商務印書館の現有資産を5万元と査定し、残りの5万元は関係者から資金を募集した。この時、商務印書館職員、また該社から本を出版している著訳者が増資に参加した。そのなかのひとりに謝洪賚がいる。さらに彼の弟賓賚は商務印書館に入社した。謝賓賚にとっては、これが終身勤務のはじまりとなる。

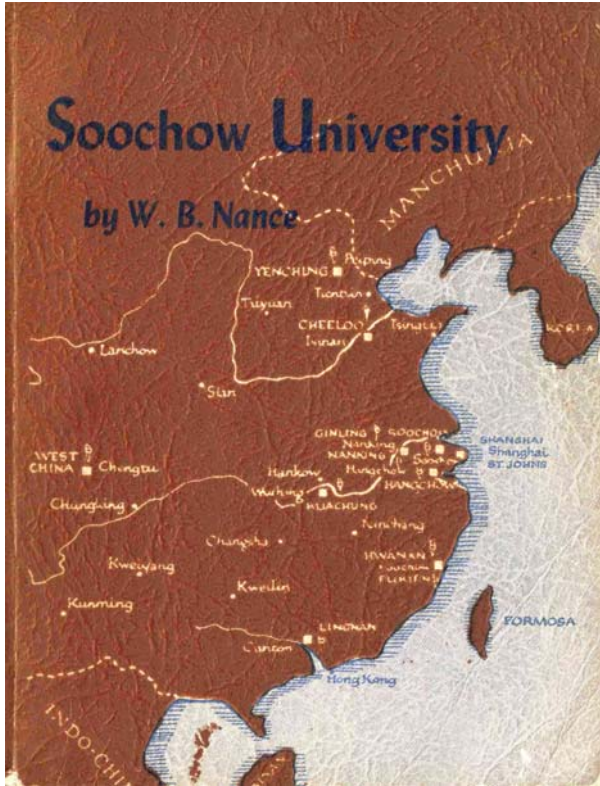
こう見てくると、謝洪賚と商務印書館の関係が深いことは理解できる。では、奚若と謝洪賚が会おうのはいつ、どこでなのか。

奚若と東呉大学

漢訳名で「監理会」と称するのは、南部メソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church, South、あるいは Methodist Episcopal Mission, South) である。メソヂスト監督教会は、1840年代から中国での布教を開始した。1870年代、蘇州において診療所と病院を設立し中西医院と名づけた。1880年代には天賜荘の土地を購入し「蘇州博習医院 Soochow Hospital」を開院してもいる。この系列の蘇州における学校が、主日学校でありそののち存養書院となった。1884年、アメリカ人支援者を記念してさらに博習書院 (Buffington Institute) と改名する*18。

メソヂスト監督教会が創設経営する学校は、蘇州と上海に複数があった。統廃合をくりかえし移転もしたからその歴史は複雑だ。簡単に述べると、蘇州の主日学校が存養書院に改称され、さらに博習書院となる。上海中西書院の一部が博習書院に編入される。蘇州において別に創設された宮巷中西書院も、時期をずらして博習書院に統合される。それらをまとめて1901年に東呉大学 (あるいは東呉大学堂、また蘇州大書院。Central University of China 後に Soochow University) が設立されるという経緯である。ただし、上海の中西書院は規模が大きくなっており、蘇州の東呉大学はまだ開設したばかりで全面的に受け入れるには小さすぎる。完全に統合するまでに時間がかかった。1911年だという。

謝洪賚が学んだのがこの博習書院であることはすでに述べた。彼の年齢と書院の変遷を見ると、前身の存養書院に入学し、在学中に書院の改名があった。書院では



W.B.Nance,
SOOCHOW UNIVERSITY
(東呉大学)

英語の人材を養成するために1887年、英語科を増設した。これも謝洪賚の在学中のことだ。ただし、前述のように謝が英語を学んだのはこのときではない。卒業後もパーカーと行動を共にしており、上海中西書院で教鞭をとっている。パーカーが該書院をやめるのは1905年だ*19。東呉大学創立当時の理事のなかにパーカー（潘慎文）の名前がある。1907年も理事のひとりとして名を連ねている*20。1905年までパーカーは上海中西書院の責任者だった。その時、彼は東呉大学の理事を兼ねていたと推測できる。ならば、行動を共にしていた謝洪賚も基本的には上海にいたと考えていい。商務印書館が1903年に金港堂と合併したとき投資して株主になった。それ以前から刊行物を商務印書館から出している。商務の編集を兼務していた。上海に居住していればなにかと便利だったにちがいない。

奚若が漢訳の「天方夜譚」を商務印書館発行の『繡像小説』に連載しはじめるのは1903年のことだ。商務印書館を仲介させて謝洪賚と奚若が関係しているようにも見える。しかし、学校を通じて知りあったと考えたほうが自然なのだ。謝洪賚が教師で奚若が学生という関係がわかりやすい。

東呉大学の理事であり英語と神学の教授でもあったナンス（Walter Buckner Nance

文乃史。1868-) *21が次のように書いている。

1899年に博習書院から上海中西書院に編入した学生たちのなかに、牧師になる準備をする希望をもったものが3名いた。1901年、東呉大学で神学が提供されるのではないかという期待のもとに彼らは蘇州にもどったのだ。彼らはW・B・ナンスのもとに配属された。大きな興味をもってスティーヴンスのパウロ神学を読んだばかりだというので、ナンスはクラス討論のために中国語の口語を使って短い部分を音読した。学生たちは、ノートをとりその経過を「平易な文言文 [Easy Wenli] 」で書き出すように求められた。奚伯綏 [P.S.Yie (Hsi Pai-shou)] が非常にうまくそれをやってのけ、彼の原稿はたびたびアレン博士のもとに送られ『教保』に掲載された。ほかの2名の学生は、そのような作業をこなすことができず、すぐに脱落した*22。

アレンは、早くから教会関係の定期刊行物を出版していた。1868年に『教会新報』を創刊し、これはのちに『万国公報』と改称する。上の引用文に見える『教保』は、1900年から1904年まで上海で刊行されていた。これもメソヂスト監督教会が発行する月刊誌だ。

奚若は、東呉大学でナンスの学生だった。そのナンスが記録しているのだから信頼できる証拠となる。

注目されるのは、1901年に東呉大学のある蘇州へもどっていることだ*23。さらに、それ以前における奚若の経歴がわずかだが明らかになっている。蘇州の博習書院の学生から上海中西書院に編入したという。ここが奚若と謝洪賚の接点になったであろうことは、容易に推測できる。

その推測は当たっている。ナンスは、さらにつぎのように証言する。

奚 [Yie] は、中西書院において2年間を謝洪賚 [H.L.Zia] のもとで非常に大きな恩恵を受けた。また、謝はその特異な人を忘れはしなかった。ゆえに、1906年に彼 [謝洪賚] が中西書院を辞任し、Y M C A 全国協会 [the National Committee of the Y.M.C.A.] の編集の仕事に専念することにしたとき、奚に協力するように頼んだのだ。いうまでもなく、学生たちにキリスト教の学問を準備するという重要な仕事の後継者となるように、奚若に期待したからだ。

奚は積極的にそれに応じ、それは幸せで有意義な仲間だった。^{*24}

しかし、肺病がふたりを襲った。先に奚若が、数年後の1916年には謝洪賚がなくなった。

ナンスの文章から、奚若は1916年以前に死去したことがわかる。すると、私が前述した1919年の『張元濟日記』に見える奚若はどうなるか。「1919年5月15日の『張元濟日記』には、奚伯綬の普通預金についての記録がある。当時も商務印書館に勤務していたらしい」と書いた。普通預金とは、商務印書館が自社で運用していた口座だろう。勤務していたところではない。1919年は、奚若が死去してかなり時間が経過しているはずだ。なぜ張元濟が故人となった奚若の普通預金についてこの時期に記録を残しているのか。これについては、詳細が不明である。

奚を Yie と表示することに疑問を出しておいた。ここでは、謝洪賚 に H.L.Zia を当てている。Zia もウエード式表記にはない。だが、『近代中国専名翻訳詞典』にはいくつか見られる。普通の表記らしい。

ナンスの記述は、1901年から1906年にとんでしまう。中間の説明がない。謝と親しかったパーカーが中西書院を辞めたのは1905年だというから、1906年まで謝洪賚は中西書院に留まっていた。その時はパーカーと行動を共にしなかったようだ。

1903年に刊行された東呉大学の年鑑は、奚若の経歴を知るためのひとつの資料となる。

李凱がアメリカに所蔵される1冊を確認し、いっぽうで諸家瑜が蘇州大学所蔵の別本を見た。それぞれがウェブサイト上で報告しているのを参照する。

『東呉大学堂雑誌之一 Soochow University Annual, 1903』と見える。これは扉の表示だ。表紙には「雁来紅」と赤字で書かれている^{*25}。年鑑といいながら、1903年に1冊だけが刊行されて中断した。

該書の記述から、奚若に関連して重要な3点が判明する。

ひとつは、該書に奚若が登場する。1903年に彼が東呉大学に在籍していたことの証拠となる。

ふたつは、該書の編集長が奚若であることだ。

「雑誌構成事務員 BOARD OF EDITORS」と称して5名の肖像が掲げられている。編集委員会のメンバーたちだ。その中央に位置しているのが「奚若 総編次者 EDITOR IN CHIEF」である。私が以前に見たのは、遠くから撮った奚若の写真（上述の速成



奚若（伯綬）1903年 ウェブサイトで公開されている写真から部分引用する

小学師範講習所第1回卒業の集合写真)だ。集合写真だから顔の判別などできないほどに小さい。だが、こちらの肖像写真は表情がはっきりとわかる。

みつつは、教授(教習)名簿に奚若の名前がある。「HSI PAI-SHOU, ASSISTANT IN SCIENCE, 奚伯綬, 格致幫教」だという。

「格致」について、物理学化学を総称するという、と辞書は説明する。上の記載には英文が添えられているのだから科学としておく。「幫教」は教授を補助する役目だから、今でいう助教、助手だ。

奚若は、当時まだ学生だった。だが、学生でありながら一部の授業では教授の手伝いをしていたことになる。学力優秀であったことがわかる。しかも、商務印書館が刊行する『繡像小説』には漢訳「天方夜譚」を連載しはじめる。さらに、商務印

書館の編訳所で勤務をするかたわら速成小学師範講習所の講師までも担当するのだ。時期的には前後している可能性もあるが、基本的には学生でありながらの活動だった。

奚若がアメリカに渡ったのは、蔣維喬日記にあるように1910年のことだった。オベリン大学に入学した。

奚若とオベリン大学

現在インターネット上で流布している奚若とオベリン大学に関する情報の出処は、ただひとつである。私の知るかぎり、李凱が公表した文章がもとになっている。彼は、オベリン大学の年鑑から探し出したと書いている。ただし、出典となる文献名を明記していないから追跡確認することができない。誰もが李凱の書くまを引用（彼の名前を出ささないは別に）して、それが広く知れ渡っている。

私も李凱の文章にもとづいて紹介する。

奚伯綬は、1880年6月8日に生まれ、1907年に東呉大学を卒業した。1902年から1908年まで商務印書館編訳所で仕事をした。1910-1911年にオベリン神学校（OBERLIN THEOLOGICAL SEMINARY）において RICHARD PAI-SHOU YIE の名前で登録し、修士課程を学び1911年に修了して修士の学位を授けられた。帰国後、『進歩雑誌』（『進歩』とも）の編集者となり、1914年8月25日上海で亡くなった。

奚若の生没年がはじめて明らかにされた。東呉大学の卒業年が1907年であることを指摘したのも最初だろう。

李凱の資料発掘によって、奚若の経歴が以前よりもかなりわかってきたといえる。

謝洪賚が1916年に死亡するよりも前に、奚若は肺病で世を去った。これがナンスの証言だった。奚若の死去が1914年であるとわかればナンスの証言と一致する。

東呉大学の卒業年について異説があるので紹介しておく。王国平『東呉大学簡史』（48、215頁）は1909年だというのだ。第1回卒業生を出したのは1907年であって、沈伯甫ひとりの名前がある。奚若は少し遅れて第3年目の卒業になっている。

では、李凱の書いているのは誤りか。そうとばかりはいえない。私の見る別の資料には、1907年卒業と書いてある。

『組合教会年鑑1911 [THE CONGREGATIONAL YEAR-BOOK, 1911.]』の名簿に奚若の名前があるのをみつけた（下線は筆者がほどこした）。上の行が項目を示す。

NAMES AND RESIDENCES	College and Year of Graduating	Seminary and Class
Summers, Henry Howard, Harrisburg, Pa.	Howard U. 1910	Oberlin, Jun.
Suychiro, Asajiro, Oita, Japan.	Steele C. 1894	Pacific, Grad.
Swann, John Austin, New Haven, Conn.	Syracuse U. 1893	Yale, Spec.
Tajima, Kengo, Nishinasu, Japan.	No. Japan C. 1908	Pacific, Mid.
Thayer, Earl H., Moravia, N. Y.	Syracuse, 1909	Hartford, Mid.
Thienes, Elmer E., Indianapolis, Ind.	U. of Mich. 1910	Hartford, Jun.
Thomas, Ernest L., Cedartown, Ga.	—	Atlanta, Sen.
Thomas, Stephen Carkeek, Sutter Creek, Cal.	U. of Pacific, 1908	Pacific, Mid.
Thompson, Carl Gabriel, Chicago, Ill.	—	Chicago, Sw. Mid.
Thomson, Wm., The Cross, Doune, Perthshire, Scot.	Glasgow U. 1907	Hartford, Sen.
† Threlfall, John Wesley, Shaw Mills, England.	Cliff C. —	Bangor, Jun.
Tiede, Otto J., Park Ridge, Ill.	Redfield, —	Chicago, Ger. Sen.
Timberlake, Ralph Moore, Montreal, Canada.	McGill, 1908	Yale, Sen.
Todd, Gordon Butchers, Corona, Cal.	U. of Cal. 1909	Oberlin, Mid.
Tokas, Christie G., Salonica, Turkey.	U. of Athens, 1907	Chicago, Jun.
Tompkins, Seeley Kelley, Branford, Conn.	Oberlin, 1901	Yale, Jun.
Trust, Harry, London, England.	—	Bangor, Jun.
Tsuji, Tadayoshi, Nagasaki, Japan.	Waseda, 1908	Pacific, Mid.
Tunison, Mahlon Cleveland, W. Hartford, Conn.	U. of Mich. 1908	Hartford, Sen.
Tuttle, George A., Hartford, Conn.	West. Res. 1903	Hartford, Sen.
Tuttle, Harold Saxe, Sunol Glen, Cal.	U. of Pacific, 1905	Pacific, Sen.
Tuttle, Warren Walter, Waucoma, Ia.	Grinnell, 1907	Yale, Spec.
Twitty, Starling Richmond, Cheotah, Okla.	Hendrix, 1901	Yale, Mid.
Uhlir, Joseph, Cleveland, Ohio.	—	Oberlin, Slav.
Ullom, Thomas Penn, Barnesville, Ohio.	—	Yale, Sen.
Vasku, Francis, Academy, So. Dak.	U. of Iowa, 1907	Oberlin, Sen.
Vaybinger, Ira Dwight, Delaware, Ind.	M. Hill C. 1910	Oberlin, Jun.
Vincent, Harold Gaston, Oberlin, Ohio.	Oberlin, 1906	Oberlin, Sen.
Vogt, Von Ogden, New York City, N. Y.	Beloit, 1901	Yale, Sen.
Wainwright, George Hiroshi, Okayama, Japan.	Oberlin, 1910	Oberlin, Mid.
Walsh, Charles Ernest, Arion, Ia.	—	Bangor, Jun.
Walton, Elmer Ruel, Columbus, Miss.	U. of Miss. 1905	Yale, Sen.
Warner, John, Lowell, Mass.	—	Yale, Grad.
Washington, George, Athens, Ohio.	Wilberforce, 1895	Oberlin, Grad.
Waterhouse, Paul B., Pasadena, Cal.	Princeton, 1907	Hartford, Mid.
Watkins, Commodore Robert, Nashville, Tenn.	Yale, 1909	Yale, Grad.
Weatherby, Charles W., Henderson, Tex.	—	Atlanta, Mid.
Weatherby, J. Lloyd, Pittsburg, Tex.	—	Atlanta, Mid.
Webb, Ernest Clay, Webb City, Mo.	Vanderbilt U. 1908	Yale, Sen.
Weir, Howard Robert, Warren, Ohio.	Hiram, 1907	Yale, Jun.
Weissenburger, Jacob, Coal Harbor, No. Dak.	Teachers' Sem. Grossliebenthal, Russia, —	Chicago, Ger. Sen.
Wells, Clifford W., Grinnell, Ia.	Iowa, 1910	Hartford, Jun.
West, Minnie, Spartansburg, S. C.	—	Atlanta, Jun.
Whidden, George Edmund, Truro, N. S.	Queen's U. —	Bangor, Sen.
Whitaker, Robert Burdette, Berkeley, Cal.	Cal. C. 1908	Pacific, Spec.
White, Clyde N., South Bend, Ind.	—	Atlanta, Jun.
White, Francis Dale, Chicago, Ill.	Hope, 1907	Chicago, Sen.
Wickham, Malachi, Tuseumbia, Mo.	Knox C. 1909	Oberlin, Mid.
Wileox, Sidney Warren, San Francisco, Cal.	U. of Cal. 1905	Pacific, Grad.
Williams, Clarence Russel, Philadelphia, Pa.	U. of Pa. 1892	Yale, Grad.
Williams, David Rees, Nickleville, Pa.	Marietta, 1910	Andover, Jun.
Willoughby, Bertram Alvin Gamsby, Chicago, Ill.	Central U. 1907	Chicago, Mid.
Wilson, Bryant, Berkeley, Cal.	U. of Cal. 1910	Yale, Jun.
† Wilson, Samuel Joseph, Sheffield Academy, N. B.	Bible Tr. Sch. —	Bangor, Sen.
Wolfe, George E., Annville, Pa.	Penn. 1909	Hartford, Mid.
Wood, Arthur Evans, Dorchester, Mass.	Harvard, 1906	Andover, Sen.
Woolf, Mahlon Hart, Rittman, Ohio.	Wooster, 1909	Oberlin, Mid.
Wordsworth, Watson, Wallingford, Vt.	Amherst, 1909	Hartford, Jun.
Yearwood, C. H., Georgetown, Brit. Guiana.	Queen's C. —	Yale, Sen.
Yie, Pai Shou, Shanghai, China.	Sochow, 1907	Oberlin, Jun.
Yoho, Jefferson W., Bethany, W. Va.	W. Va. U. 1897	Yale, Sen.
Young, Clarence Boehmer, Hillsdale, Mich.	Oberlin, 1910	Oberlin, Jun.
Zalewski, Boleslaw, Detroit, Mich.	—	Oberlin, Slav.
Zavodsky, Louis, Cleveland, Ohio.	—	Oberlin, Slav.

Names and Residences | College and Year of Graduating | Seminary and Class
Yie,Pai Shou, Shanghai, China | Soochow, 1907 | Oberlin, Jun.

「奚伯綏、上海、中国」は、姓名と住所だ。中国では上海に居住していた。つぎの蘇州は蘇州大学、つまり東呉大学を卒業したのが1907年であることを示す。1910年当時はオベリン神学校のジュニア・クラスに所属していた。

ここに見る記述は、奚若本人が提出した書類にもとづいているだろう。東呉大学は蘇州にある。そのの学生だが上海を住所としていた。自己申告して卒業は1907年だ。王国平が書いている1909年よりも早い。そのどちらが正確なのかはわからない。奚若の考えではすでに卒業していた。少なくとも、アメリカの資料には1907年卒業となっていることを指摘しておく。

奚若がオベリン神学校で学んだのは、わずか2年間にすぎない。修士号を得て帰国した。学歴からいえば、帰国後はそのまま東呉大学で教えることになったとしても不自然ではない。だが、その事実はなさそうだ。

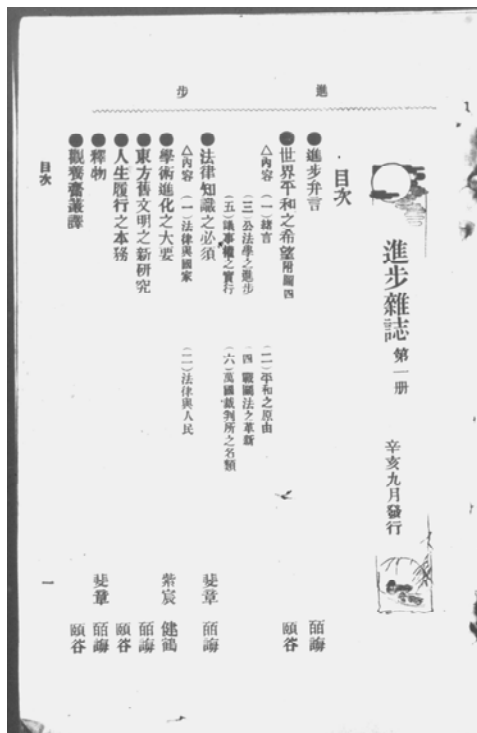
ナンスの証言があった。謝洪賚が専念した「YMCA全国協会の編集の仕事」だ。彼の説明によれば、それは1906年以後の事になる。『青年会報』が『青年』と改題したのが1906年2月*²⁶だというからそれと合致する。これにも異説がある。謝洪賚が中西書院と商務印書館の仕事をやめるのは1903年だ、と趙曉陽が説明している。ナンスの証言とは時間的な開きがある。

最初は『青年会報』の副主筆だったという。『伝略』によると、謝洪賚が中西書院を辞任したのは1906年だった(37頁)。中西書院の教授と雑誌編集を兼務していて、主筆をつとめるために謝洪賚は中西書院をやめた。ならば、謝洪賚が奚若と共に働いていたというのは1906年からでいいのだろう。

奚若と謝洪賚が1906年から編集の仕事をはじめていたのならば、彼らが参加した刊行物は『青年』ということになる。実際に見ることができないので今はなんとも書きようがない。はっきりとわかる雑誌の刊行は、奚若がアメリカ留学を終えて帰国したあとである。

奚若と『進歩雑誌』

表紙には「進歩 / PROGRESS」とある。だが、目次の表示は「進歩雑誌」だし、



『進歩雜誌』第1冊目次



『進歩雜誌』第1卷第2号1911.11


趣旨説明をしているのは「進歩雜誌簡章」と題する。本稿では雑誌名を『進歩雜誌』と呼ぶ。発行の年月は、目次に「辛亥九月発行」とある。しかし、巻末の英文目次では「Vol.1. November,1911, No.1.」となっていて一致しない。たぶん英文の方が実際の発行月だろう。

該誌はマイクロフィルムで見たが、編集人については記載がない。私の見落としかと思う。たとえば上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』4（上海人民出版社1982.2。3340頁）の欄外注釈には、おおよそ次のような説明がある。『進歩雜誌』1911年九月創刊。月刊。奚若、頤誨（范禕）などが主編。1917年、『青年』と合併して『青年進歩』となる。ここには、奚若の名前があげてある。また、方漢奇「進歩」（中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第4集 北京・人民出版社1986.10。181頁）にも「奚若、字は伯綬、筆名天翼」とあって『進歩雜誌』を編集したことに言及している。ただし、趙曉陽（106-107頁）の著作には奚若の名前がでてこない。

奚若は、筆名天翼を使って文章を多数発表した。外交評論、翻訳、論文などそれ

らの内容は多岐にわたっている。それも第5巻第6号（総第30冊1914.4）を最後に見なくなる。奚若が肺病で死去するのが1914年というから、それが原因だろう。

奚若は商務印書館の理事に選出されたことがある*27。それは1912年のみだったようだ。

奚若は『英華大辞典』を増補する仕事を引き受けたことはわかっている。1912年のことだった。以上に奚若の経歴をさぐってきたことをふまえると、すこし状況がわかる。その時、奚若が商務印書館編訳所の所員であった可能性は少ないのではなかろうか。『進歩雑誌』の編集と原稿執筆に専念していた時期だ。辞典の増補は臨時の仕事であったと考えておく。 

【注】

- 1) 青年協会書局などについては、当初、何凱立著、陳建明、王再興訳『基督教在华出版事業（1912-1949）』（成都・四川大学出版社2004.8。99頁）に拠った。「中国YMCA書報部は青年協会書局（Association Press）と改称」を1914年としたのも該書による。また、別の記述がある。江文漢「基督教青年会在中国」（『文史資料選輯』第19輯 1961.9 / 1981.3第2次印刷（日本影印）。15頁）には、「協会〔中華基督教青年会全国協会〕自一九一二年起成立的“書報部”又發展成為“青年協会書局”」とある。その後、より詳しい次の論文が発表される。趙曉陽「青年協会書局与中国基督教文字事業」中国社会科学院近代史研究所編『中国社会科学院近代史研究所青年學術論壇（2004年卷）』北京・社会科学文献出版社2005.11。こちらでは、青年協会書局と改称したのは1924年だということ（421頁）。
- 2) 朱宝樑編著『20世紀中文著作者筆名録』修訂版（桂林・広西師範大学出版社2002.10。1837頁）は、あいかわらず周樹奎（桂笙）の項目に奚若を収録している。陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』（杭州・浙江古籍出版社2005.1。819頁）も同様。
- 3) 老陳「商務印書館1908年編輯部同人名單」ウェブサイト「涵芬樓書話」2006.6.26
- 4) 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」『文史資料選輯』第53輯1964.3/1981.6第二次印刷（日本影印）。142-143頁。『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1。203-204頁

- 5) 高鳳岐(嘯桐)の死去と追悼会(2回)の日付は以下のとおり。
宣統元年二月十三日(1909.3.4)、死去。「蔣維喬日記」55頁。張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12。81頁
同年閏二月廿八日(1909.4.18)、愚園にて同郷会の追悼式。中国歴史博物館編、勞祖德整理『鄭孝胥日記』第3冊 北京・中華書局1993.10。1179頁
同年三月十二日(1909.5.1)、商務印書館で追悼式。「蔣維喬日記」55頁。
『張元濟年譜』81頁
- 6) 『張元濟全集』第4巻詩文 北京・商務印書館2008.12。321頁。同第5巻、81頁
- 7) 柳和城「商務印書館法律顧問丁榕」『出版史料』2003年第3期(新総第7期) 2003.9.25。『商務印書館一百一十年(1897-2007)』北京・商務印書館2009.7
- 8) 謝洪賚については、汪家燊論文によって本稿を書き進めていた。のちに趙曉陽『基督教青年會在中國：本土和現代的探索』(北京・社会科学文献出版社2008.10。109-110頁)を見ていくつかの異同があることを知る。どちらが正しいのか確定する資料を持たない。趙曉陽にしても記述がゆれる。謝洪賚の博習書院入学は、最初十一歳としていた(趙曉陽「中国基督教青年會早期文字貢獻者謝洪賚及著述目錄」『基督宗教研究』第9輯2006電字版)。後に十九歳に変更する。その根拠は不明。
- その後、胡貽穀(玉峯)『謝廬隱先生伝略』(上海・青年協會書報部1917.12(范禕の序は1918年1月7日付)。以下、『伝略』と称する)の複写を入手した(扉の英語表記を参考までに掲げる。THE LIFE OF H.L.ZIA by Y.K.WOO / THE ASSOCIATION PRESS OF CHINA / THE PUBLICATION DEPARTMENT OF THE NATIONAL COMMITTEE OF THE YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION OF CHINA)。謝洪賚に関しては、基本的にこの『伝略』に基づいている。ただし、筆者の判断で訂正した個所もある。たとえば、生年月日だ。胡は、同治十二年四月十二日だと書いている。それに西暦表記をそえて1873年5月9日とする。しかし、旧暦の日付が正しいとすれば、新暦8日でなければならない。
- なお、以下の論文を参照した。朱謝文秋「敬述先君謝公洪賚行誼」『伝記文学』第22巻第4期 1973.4.1。謝扶雅「謝洪賚与青年會」『伝記文学』第23巻第4期 1973.10.1

また、謝洪賚「華英初階序」、「論英文讀本」を宋原放主編、汪家燊輯注

『中国出版史料・近代部分』（第2巻 武漢・湖北教育出版社2004.10）で読むことができる。

鄒振環「謝洪賚及其基督教著述」徐以驊、張慶熊主編『基督教学術』第7輯上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2009.5がある。

ウェブサイト「華人基督教史人物辞典」がある。それに「謝洪賚」の項目が見える（李亜丁執筆）。

- 9) 計画では11年課程であったようだ。前半の5年は予備課程（preparatory course）で、中国古典、自然科学と宗教教育を行なう。後半の6年間は書院課程（college course）で同様の内容だったという。王国平『博習天賜莊 東吳大学』石家荘・河北教育出版社2003.12。15-16頁
- 10) 中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版社1981.12。373頁
- 11) 熊月之『西学東漸与晚清社会』上海人民出版社1994.8。483頁
- 12) 『伝略』にもとづく。一説に1896年。汪家焜は、『中国出版通史』7清代卷（下）（北京・中国書籍出版社2008.12。180頁）において自説の1895年を変更して1896年とする。また、同じく1896年と書くのは、王国平『博習天賜莊 東吳大学』150頁だ。しかし、王国平『東吳大学簡史』（蘇州大学出版社2009.7。107頁）では1895年になっている。奇妙なことに該書193頁では、やはり1896年とする。記述がブレている。趙曉陽は1895年とする。なお、中西書院にはつぎの文章がある。梁元生「7 上海中西書院考略：一個教育理想的創建与幻滅」『晚清上海：一個城市的歷史記憶』桂林・広西師範大学出版社2010.6。141-159頁
- 13) 『近代来華外国人名辞典』8頁
- 14) 商務印書館が発行した『繡像小説』に謝洪賚名の文章がある。以下のとおり。
山陰謝鴻賚訳意 嘉定徐少范述文「西訳雜記卷一」『繡像小説』第6期 癸卯六月十五日（1903.8.7）
大彼得軼事 / 奧君約瑟軼事 / 拂烈士軼事 / 烏白朶 / 鼠災 / 記雪沢蘭事
なお、同じく同誌に連載された、奥国維也納愛孫孟著「環瀛誌陝」（『繡像小説』第5、11、13、14、18-25期 癸卯六月初一日-第13期より刊年不記〔甲辰4.1〕（1903.7.24-〔1904.5.15〕とするは誤り））も謝鴻賚、徐少范訳述とする目録がある（〔景深726016〕）。初出には訳者名がない。参考までにかかげた。

- 15) 伍杰編『中文期刊大詞典』上 北京大学出版社2000.3。1223頁
- 16) 史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。
203頁
- 17) 趙曉陽「青年協會書局与中国基督教文字事業」417頁
- 18) メソヂスト監督教会の中国における活動についてはつぎの書籍を参照した。
王国平『博習天賜荘 東呉大学』10-14頁。また、書院の変遷についても同書による。19頁
- 19) 熊月之『西学東漸与晚清社会』619頁
- 20) 王国平『博習天賜荘 東呉大学』25頁。29頁
- 21) 『近代来華外国人名辞典』351-352頁。
- 22) W.B.Nance, *SOOCHOW UNIVERSITY* (東呉大学), UNITED BOARD FOR CHRISTIAN COLLEGES IN CHINA, N.Y., 1956。p.66
- 23) 1901年中西書院卒業生の中に奚伯綬がいる。王国平『東呉大学簡史』214頁
- 24) W.B.Nance, *SOOCHOW UNIVERSITY* (東呉大学)。pp.66-67
- 25) 王国平『東呉大学簡史』(105頁)は、『雁来紅』の書影と奚若(伯綬)の肖像を掲げる。該誌がウェブサイトで話題になったのは奚若の経歴を探求する過程においてであった。その関係で王国平の著作にも奚若が出てくるのだろう。ただし、せっかく奚若だけを写真から抜き出しながら、王国平はその理由を何も説明していない。
- 26) 趙曉陽「青年協會書局与中国基督教文字事業」418頁
- 27) 梁長洲「商務印書館歴届董事名録」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。35頁

【参考文献】

- 汪 家熔「記《華英初階》注訳者謝洪賚先生(1875-1916)」『商務印書館館史資料』之三十七 商務印書館総編室編印1987.4.10。『出版史料』1988年第3・4期(総第13・14期)1988.9。『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 「記《華英初階》注訳者謝洪賚先生」『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 汪 家熔「謝洪賚和商務創辦人的關係」『編輯學刊』1994年第4期(総第36期)

1994.8.25。『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10

陳 応年「奚若，一位被人們遺忘的翻譯家」『中華讀書報』1999.7.14電字版

謝天振、查明建主編『中国現代翻譯文学史（1898-1949）』上海外語教育出版社
2004.9。68頁

查明建、謝天振著『中国20世紀外国文学翻譯史』上下巻 武漢・湖北教育出版社
2007.2。87頁。奚若については、上記文学史と同文。

趙 曉陽「中国基督教青年会早期文字貢獻者謝洪賚及著述目錄」『基督宗教研究』
第9輯2006。初出未見。ウェブサイト「現代中国研究」

樽本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』清末小説研究会2006.6.1。30-36頁

沢本香子「アラビアン・ナイトの翻譯者奚若」「樽本論文補遺3題」所収『清末小説から』第85号2007.4.1

李 凱「東吳名人：被遺忘的翻譯家奚若」ウェブサイト「江陰赤岸李氏」
2007.2.23電字版

「夜読《雁来紅》」ウェブサイト「江陰赤岸李氏」2007.8.28電字版

諸 家瑜「《雁来紅》雜考 兼談《雁来紅》与黄人（摩西）之間的關係」ウェブ
サイト「蘇州地方志」2009.9.11電字版

奚若と謝洪賚の略年譜		
	奚若（伯綬）	謝洪賚
1873		5.8 紹興の人
1880	6.8 蘇州の人 [李凱]	
1883		蘇州博習書院に入学（十一歳）
1885		メソヂスト監督教会信徒となる（十三歳）
1892		パーカーの面識を得る。卒業（二十歳）
1895		パーカーの上海中西書院院長就任にともない上海へ。教授となる
1897		結婚。中西書院にY M C Aを設立。中国Y M C A組合事務所編『青年』創刊
1899	蘇州の博習書院から上海の中西書院へ編入	教授謝洪賚、学生奚若という関係。『華英初階』（商務印書館）訳注

1900		上海Y M C Aの夜間学校で英語を教える
1901	蘇州へもどり東呉大学のナンスのもとへ	全国協会委員に選出される
1902	商務印書館編訳所勤務	中国Y M C Aに書報部が成立。『学塾月報』を『青年会報』に改題。上海Y M C Aの理事
1903	東呉大学 『東呉大学堂雑誌之一 Soochow University Annual, 1903 (表紙：雁来紅)』編集長 「奚伯綏 HSI PAI-SHOU 格致幫教 ASSISTANT IN SCIENCE」 「天方夜譚」を『繡像小説』に連載開始	書報部に参加。『青年会報』の副主筆。商務印書館が金港堂と合併。投資して株主のひとりとなる
1906	商務印書館編訳所勤務。速成小学師範講習所教師	上海中西書院をやめる。『青年会報』を『青年』に改題、主筆となる。『最新高等小学理科教科書』1-4冊。商務印書館1906.4。6版
1907	東呉大学卒業 [李凱]。渡米を計画する	日本での世界学生大会に参加
1908		肺病(三十六歳)。アメリカのコロラドで1年間治療
1909	東呉大学卒業 [王国平] 商務印書館編訳所勤務	廬山で静養。「免癆神方」を書く
1910	渡米。呉興奚若編纂『華英会話文件辞典』商務印書館 庚戌年八月初版、民国六年二月八版 オベリン神学校 (Oberlin Theological Seminary) 入学 Richard Pai-Shou Yie [李凱]	
1911	硕士学位を取得して卒業 冬 中国Y M C Aの『進歩雑誌』を編集 筆名天翼	
1912	商務印書館理事	
1914	8.25 肺病により死去 [李凱]	
1916		9.2 杭州で病没
1917		12 胡貽穀(玉峯)『謝廬隱先生伝略』上海・青年協会書報部

(たるもと てるお)